

大河ドラマ「天地人」の舞台である山形県米沢市。この城下町の基盤を築いた人物こそが直江兼統である。ここでは直江兼統治水利水施設群の一つ、「直江石堤」を紹介する。

1. はじめに

JR米沢駅から車で約10分。直江堤公園では、直江兼統の計画によって築かれた石積の堤防「直江石堤」を見ることができる。現在、長さ約1.2kmにわたって石堤が残っており、その地名から谷地河原堤防とも呼ばれる。石堤の断面は、上辺約5m、下辺約9m、高さ約2mの台形型で、材料となる石は最上川（松川）から現地調達したものである。昭和61年に米沢市の史跡に指定、また平成20年度に土木学会選奨土木遺産にも認定されている。



写真 1 直江石堤

2. 直江石堤ができるまで

直江兼統は、米沢藩初代藩主上杉景勝を支えた智勇兼備の武将である。慶長5年（1600）関ヶ原の合戦で東軍（徳川方）が勝利した際、西軍（石

田方）に加担した景勝は会津120万石から米沢30万石へ減封となった。このため米沢は上杉氏の本城となり、家臣6,000騎余とその家族、職人、商人、僧など計約3万人が移り住むこととなった。当時の米沢は人口が6,000人ほどの小さな城下町であった。兼統は新たな城下町の整備に取り組み、屋敷割・町割、開墾事業、治水事業等を勢力的に進め、慶長14年（1609）にようやく完成したと伝えられている。

その頃、松川（現在の最上川）は河床が浅く、傾斜も急で、大雨の度に水があふれて城下に流れ込み領民を苦しめたという。兼統は自ら赤崩山に登り、米沢城や松川の地形を見渡し、洪水を防ぐにはどうしてもここに堤防を築かなくてはならないと決心し、大規模な築堤を計画したのである。

3. 直江石堤の改修

兼統の築堤後も豪雨や洪水等で決壊し、米沢藩により周期的に改築がなされた。藩の記録によると6回、このうち寛政10年（1798）と文化9年（1812）の工事内容については、詳細な記録絵図として残っている。

寛政10年「東河原川除土手御手伝御絵図」は現在の吾妻町から下花沢町にかけてまでの大規模な改修工事を記録した絵図で、距離1,456m、延べ動員数は18,583人に及んだ（米沢市上杉博物館収蔵「上杉文書」）。

文化9年「谷地河原御手伝川除絵図」は、7月9日の大雨で決壊した石堤を改修した記録絵図で、改修された石堤の箇所を朱書きで表し、下方



図 1 谷地河原御手伝川除絵図(市立米沢図書館所蔵)と谷地河原堤防全体図

に工事を担当した家臣団と担当の距離数が記されている。こうした堤防の工事は「御手伝」と称し、家臣(藩士)の手によって行われた。この際の武士の延べ人数は約12,000人で完成後前藩主上杉鷹山が視察に訪れている。完成した石堤を見学した鷹山は家臣の手で積まれた石堤を踏むのを躊躇され、まず手で石堤に触れて感謝を示してからおもむろに登ったと伝えられている(市立米沢図書館蔵「林泉文庫」)。

4. 直江石堤の特徴

史跡として指定されている石堤は1.2kmだが、これまでの調査から総延長は少なくとも8km以上の長さを有していたと想定される。

現存する石積を検討すると、次の4タイプの石積技法に分類される。

Aタイプ=河原石を横に重ねるように積むもので「野面積」と称される。平面的には巨大な石を中央に設置し、周りに大形の石を亀甲形に配するのが特徴。江戸前期頃の初期段階の石積。

Bタイプ=斜行に積むのが特徴で、江戸中期~江戸後期の補修石積。

Cタイプ=比較的大きめの礫を左右交互に積むのが特徴。江戸後期~幕末頃に出現したと推測される石積工法で、現存する主流は明治~大正頃の補修石積。

Dタイプ=人頭大の礫を交互に積むのが特徴。昭和10年頃~現代の石積工法、もしくは補修石積。

また、当時の土木工事を進める上での資材調達には原則現場調達となることから、松川の地理的要因(最上流域 巨石, 上流域 河原石, 中流域

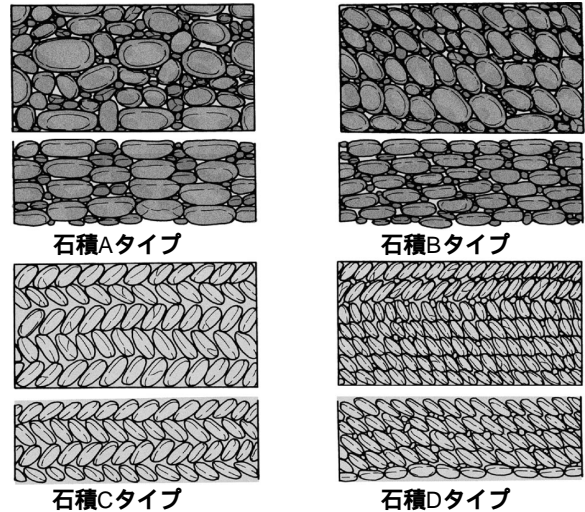


図 2 石積概念図(上段:天端 下段:法面)

砂利, 下流域 土砂)もふまえて、堤防の構築技法についても数種類のパターンが見られる。

前項で触れたが、直江石堤は度々修復がなされ、その都度その時代の技術を駆使して修復されている。このことから、さまざまな時代の変遷を石積の積み方から見る事ができるのが、直江石堤の大きな魅力である。

5. おわりに

現在、直江石堤のある河川敷は「直江堤公園」として整備され、市民の憩いの場となっている。大きな河原石が敷き詰められた石堤の上を歩くと、機械のなかった当時の大工事がいかに大変だったかが伝わる。同時に、直江兼続の偉業と治水の大切さを改めて実感することができる。

【参考文献】

- 「谷地河原堤防「直江石堤」」(米沢市教育委員会教育管理部文化課提供)
- 米沢市上杉博物館蔵「上杉文書」
- 市立米沢図書館蔵「林泉文庫」